

教職大学院

Newsletter No.205

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2026.4.17 (公開版)

LfM

Leadership from the Middle

中核からのリーダーシップを目指して

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科

研究科長 木村 優

現在、日本の教育政策の議論では次期学習指導要領の策定に向けた基本的な考え方が整理され、それに連動して大学における教職課程と教員免許制度の改革方針が提起されています。そこでは、養成・採用・研修の各段階における教師の能力育成イメージが示され、多様な強み・専門性を有する教師たちが協働で、チームとして教育実践を推進していく必要性が示されています。すなわち、子どもたち・若者たちの「主体的・対話的で深い学び」をより一層実現(実装)することのできる「質の高い教職員集団」の形成が求められていくのです。そのために、今こそ私たちがそれぞれのリーダーシップを存分に発揮する必要性も同時に高まっていると言えます。

「さあ、それではリーダーシップを発揮しようじゃないか」と息巻きたいところですが、立ち止まって状況を把握する思考様式=省察に長けた私たちは文字通り一旦「立ち止まって」、リーダーシップについて熟考しておきましょう。私たちは先達の姿から実に多くのリーダーシップの姿を見てきました。また、巷の書店を覗いてみるとたくさんのリーダーシップ本が書棚に並んでいます。たくさんのリーダーシップの姿と理論の中で、私たちは一体どのようなリーダーシップを育み発揮していく必要があるのでしょうか。そして、私たちは自身のリーダーシップを発揮するために、一体何を大切にしなければならないのでしょうか。

リーダーシップと聴いてすぐに私たちの頭に思い浮かぶのが一人の人間の素質としてのリーダーシッ

プ論です。例えばトップダウン・リーダーシップ(上意下達型)やボトムアップ・リーダーシップ(下意上達型)がすぐに思いつくことでしょう。ここで、トップダウン・リーダーシップはどうやら問題含みであることを私たちは薄々気づいています。しかし、ボトムアップ・リーダーシップを発揮すれば、事は円滑に進むのでしょうか。

教育学者マイケル・フランは「教育改革においてはトップダウンもボトムアップも両方とも機能しない。必要なのは、この二つを巧みに融合させたものである」と述べています。教育におけるトップダウンの変化は、目的が明確で結果が簡単に測定できる一方で、それだけでは長続きしない(長期にわたる改革には結びつきにくい)ことが知られています。一方、ボトムアップの変化も表面的な実践に留まりがちで抜本的な変化には結びつきにくく、またいつもうまくいくとは限らないことも知られています。

リーダーシップ論をもう少しさらってみると、近年では、一人の人間の素質としてのリーダーシップ論として、コミュニティのメンバーの挑戦を支える

内容

- | | |
|---------------------|------|
| 巻頭言 | (1) |
| 学位記伝達式修了生代表挨拶 | (3) |
| 教職大学院を振り返って(修了生の言葉) | (4) |
| 修了生に贈る言葉 | (14) |
| 退任にあたって | (18) |

サーバント・リーダーシップ（奉仕型）、組織的活動の目的における倫理と公正さを重視するエンカル・リーダーシップ（倫理公正型）、価値観を明確にしながらか自身の弱みも積極的に受け入れるオーセンティック・リーダーシップ（誠実透明型）、不確かさや不安定さに柔軟に応じるアダプティブ・リーダーシップ（適応型）といった論が出てきています。

一方、ディストリビューテッド・リーダーシップ（分散型）やシェアド・リーダーシップ（共有型）やコンプレキシティ・リーダーシップ（複雑型）といったリーダーシップ論もあります。これらは、一人の人間の素質ではなく、関係性の中で発揮されるリーダーシップを指します。私たちのリーダーシップは個に収斂して発揮されるのではなく、分かち合うことで本領発揮されるという考え方です。

さらに、リーダーシップとはそもそも完璧である必要のないインパーフェクト・リーダーシップ（不完全型）、二者択一思考を手放すボウス/アンド・リーダーシップ（両立型）といった論も近年に注目を集めています。不安定で不確実で複雑で曖昧な VUCA の世界に適したリーダーシップ論と言えるでしょう。

このように様々なリーダーシップ論が生まれているのは、一つにはリーダーシップという現象がそもそも多面的で、二つには社会変化に伴って組織観・人間観が拡張し、三つには具体的なリーダーシップ実践が広く発展してきたことが主な理由に挙げられます。どうやらリーダーシップは一人の人間に具わる固定的な能力でなく、文脈に依存する「関係的で生成的なプロセス」であるようです。こうしてリーダーシップを「関係的で生成的なプロセス」と理解してみると、私たちはいつでも、どんな立場でもリーダーシップを発揮することができそうです。

トップダウンでもボトムアップでもなく「関係的で生成的なプロセス」としてのリーダーシップに関わって、教育社会学者のアンディ・ハーグリーブスは「中間＝ミドル」に着目しました。「中間＝ミドル」は起点か終点、右か左といった「端点」から見るとどっちつかずで折衷的に思えますが、「中間＝ミドル」を端点と端点の間の単なる「中間地点」としてではなく「中心」や「核」や「ハート」として位置づけ直すことでその意味は大きく変わります。

また、よくよく考えてみると、私たちは誰でも、いつでも、何かと何かの「中間」に存在していると言えます。例えば、福井大学大学院連合教職開発研究科で私は研究科長ですのでトップのように見えますが、

福井大学全体で見ると学長をはじめとした理事メンバーと教職員との「中間」にいるザ・中間管理職に過ぎません。もっと大きな枠組みでも、例えば内閣総理大臣は国政のトップを担っていますが、広く奉仕すべきすべての国民と国会議員たちとの「中間」に位置づいて仕事をしています。

ハーグリーブスはこうした「ミドル＝中間」の意味の転換可能性と流動性に着目し、「ミドルでのリーダーシップ（Leadership in the Middle: LiM）」と「ミドルからのリーダーシップ（Leadership from the Middle: LfM）」を対比します。そして、後者の LfM がこれからの改革の鍵になるというのです。

LiM の「ミドル＝中間」は職階や年齢としての中間を指します。そこでのリーダーシップは単に「真ん中」の立場や世代というだけで「双方をつなぐ」「間を取りもつ」といった志向性が求められることとなります。つまり、「ミドル＝中間」としての信念や哲学はそれほど必要とせず、ただ与えられた役割の中でパフォーマンスの改善に努めるのが LiM です。

一方、LfM の「ミドル＝中間」は、職階や年齢としての中間を指すのではなく、組織の中心、核を指します。そこでのリーダーシップは集団としての責任（collective responsibility）を仲間と共に果たしていきます。「ミドル＝中間」としての信念や哲学を明確にもち、組織の学びを変革し、人々のウェルビーイングを最大化してコミュニティをより強固にしていくのが LfM です。

この LfM の考え方はどのような立場、年齢であってももつことができます。この意味で、伝統的なコミュニティでは少数のリーダーシップが求められてきた一方で、現在と未来のコミュニティでは多数のリーダーシップが求められると言えます。

LfM、中核からのリーダーシップを目指して、みんなで共に学び、育っていきましょう。誰もが明日の学校、明日の社会を変革できるチェンジメーカーになる時が来たのです。私たちのリーダーシップを育みながら、同僚たち、そして子どもたち・若者たちのリーダーシップを育てていきましょう。

[参考文献]

Hargreaves, A. (2024) *Leadership from the middle: The beating heart of educational transformation*, New York: Routledge.



学位記伝達式修了生代表挨拶



春のやわらかな陽ざしに包まれたこの佳き日に、かけがえのない学びの時間をともに歩んできた仲間とともに、修了の日を迎えられますことを大変嬉しく思います。

さて、皆さんにとって、この教職大学院での学びは、どのような新しいチャレンジでしたか。それにより、どのような気づきがあり、自己の変容をもたらしましたか。思えば私も、この一年は、教職大学院での学びも、幼児教育の現場も、私にとっては初めての経験であり、「分からない」世界に飛び込んでのチャレンジの日々でした。長期実践研究報告では、「うまくいった実践」や「再現可能な方法」ではなく、開こうとしたときに立ち上がる違和感やズレに立ち止まり、それを関係の中に置き続ける過程を見つめてきました。

同僚に開くこと、子どもに開くこと、地域や保護者に開くこと、そして自己を開くこと。それは、見え方の違いや価値観のズレがあることを前提に、そのズレを問いとして引き受け続ける営みでした。それは、問いの外に身を置いては到底不可能な試みでした。例えば、保護者に開くとは「説明し、理解してもらうこと」ではなく、保護者の文脈での「見え方」のズレを引き受け、「見え方」の異なる他者と、どのような関係を編み直していくのかを探究し続けることだと気づきました。そして、諦めずに対話を続けることで、少し関係性が動くといった実感がありました。「協働探究」とは、誰かが導く研究ではなく、分からなさを抱えたまま、関係の中で応答が生成され続ける状態そのものなのだと考えるようになりました。

実践研究を通して、私の中で「マネジメント」という言葉の意味も大きく変わりました。効率や成果を求めるのではなく、ズレが生まれる場に居続けること、誰かの消えそうな声を聞き、問いを置き直すこと、そして自分自身も問いの当事者であり続ける

こと。それこそが、管理職として引き受けていく役割なのだと考えるようになりました。

今回、長期実践研究報告を書き上げる過程は、走り続けてきた自分の歩みを立ち止まって振り返る時間でもありました。振り返った先は、遠い遠い遙か向こうでもあったし、4月からこれまでのことでもありました。そして、これまでの積み重ねがあるからこそ、今も歩み続けていられるのだと感じています。

教職大学院の先生方は、答えを与えるのではなく、問いを手渡し、考え続けることに伴走してくださいました。その関わりそのものが、私たちにとって何よりの学びでした。心より感謝申し上げます。また、共に学んだ仲間の存在も、かけがえのないものでした。カンファレンスで、年齢も校種も時には職種も異なる多様なメンバー同士が、仲間の話を聴きながら皆ノートに熱心に記録している光景が私は好きでした。それは教える一教えられるという関係ではないと感じました。多様な立場の仲間と問いを持ち寄り、語り合い、揺さぶられ続けた時間は、私の視野を大きく広げてくれました。

これから私たちは、それぞれの現場へと戻っていきます。思い通りにならない現実や、迷いや葛藤もあることでしょう。それでも私たちは、ここで得た問いを手放さず、同僚や子どもたちと、そして自分自身と向き合いながら、学び続けていけるのではないかと思います。

最後になりましたが、これまでご指導くださった先生方、そして共に学んだ皆様に、改めて深く感謝申し上げますとともに、皆様のこれからの歩みが豊かな学びに満ちたものとなりますことを願い、挨拶とさせていただきます。

令和8年3月24日

福井大学教育学部附属幼稚園 村上 一美



教職大学院を振り返って（修了生の言葉）



This Lifelong Journey

ミドルリーダー養成コース2025年度修了生 Saeeda Ali

In my opinion, people embarking on adventures only really think about the adventure, not so much about the ending. There's excitement about taking on a big challenge, and while there are hopes that the undertaking will grant some benefits, I find that we tend to focus more on the journey itself. The end of the journey is often too far away in the hazy distance.

Similarly, two years ago when I first walked onto campus as an official Fukui University student, I had no thoughts about graduation nor what I would do after leaving. I just knew that I wanted to become a better teacher through this programme and I was anxiously looking forward to taking part in the conferences and trying new approaches and teaching styles for lessons. I remember feeling small - definitely determined to improve, but small, inexperienced, and unsure of myself. Now that I'm graduating, I look back on this seemingly small version of myself who was just desperate to do well, and I feel so much gratitude to the people and ideologies who helped me get here, to a space where I know with certainty that I can, and do indeed do well in the classroom.

That's not to say there's no room for improvement nor that I don't make mistakes - there certainly are a lot of those! However, the very first nugget of wisdom that embedded itself in my brain is that 'mistakes' in the classroom are simply opportunities for reflection and for trying something different. I saw that viewing those valuable opportunities as mistakes prior to joining the programme was detrimental to my development as a teacher because it kept me in a state of discomfort in the classroom, of having low self-esteem, and

of lacking motivation, as my need for perfection in teaching was never met. And it never could be, because there is so much variety in every day and in every student. Throughout our lives, we will find these opportunities everywhere, not just in teaching. Students too, are constantly faced with these opportunities. Through building communities of practice through the monthly conference consultations and reflections with staff and other DPDT students, I realized that viewing these instances as opportunities for development and reflection helped me be more understanding of my students' learning process and encourage them to seek out similar opportunities. Ultimately, I like to think that this made me a better teacher.

Building and existing in communities of practice too, was yet another wonderful nugget of wisdom. As a self-proclaimed shy person, I often fretted on the level of difficulty of interacting with other practitioners. However, the monthly conferences allowed me spaces where there were other people who valued education and their own development. I learned that it was okay to feel quiet, but that also those feelings of insecurities vanished once they were acknowledged. For example, I might talk about my regrets with certain things that happened in lessons, and those regrets usually came from a place of feelings of inadequacy. The members of my groups for those sessions would listen, acknowledge my feelings, and then point out positive aspects of my situation that I hadn't noticed. I found that repeated reflections and interactions like this made me feel more confident and comfortable in those interactions and while teaching. Without

realizing it, I was becoming a more vocal contributor from focusing on my experiences rather than my feeling of inadequacy, and of being encouraged by other practitioners. I feel that it helped me also become such an encouraging practitioner for DPDT students and a more encouraging teacher for my students as well. I truly enjoyed building and maintaining these sorts of communities at the DPDT and extending this kind of support through my local ALT communities.

At the end of this adventure, I see that there is no real end, but that this journey is indeed a lifelong undertaking. Graduation signifies a new step in this fascinating and challenging journey, and I honestly find it hard to believe I'm here, just like I find it hard to believe that I'd become a master's student in the

first place. Still, it is an end of sorts, isn't it? It's the end of monthly conferences, of seeing some friends so regularly, or interacting with respected professors regularly. In a far more exciting light, it's also the end of feeling small and unsure of my capabilities. I'm looking forward to the next steps of this journey, where I can hopefully have many more opportunities for growth and become part of many more educational communities of practice.

I want to end by saying thank you to all the staff and students at the DPDT who have been supporting me for the past two years. The steady encouragement and guidance mean so much to me, and I can't believe that I've actually made it here. Onward, to even more exciting things!

省察の種を未来の糧に

～生徒と教師の個性が輝く学校を目指して～

学校改革マネジメントコース 2025 年度修了生 泉 浩

学びの地平を広げて

教職大学院での 2 年間の学びを終えようとしている今、私の心に「学びには無限の広がりがある」という思いが強くなっている。入学前の私は、教育現場の諸課題に対する明確な「正解」をどこかに求めていた。しかし、本大学院で得た最大の収穫は、自らの実践を絶えず問い直し、本質を追究し続ける「学びを更新し続ける姿勢」そのものであった。

過去に眠る「学びの種」の再発見

実践の省察を通じて再確認したのは、過去の歩みの中にこそ「学びの種」が眠っているということである。

これまで、担任として生徒一人ひとりと向き合った日々や、部活動指導で共に汗を流した時間、研究主任として同僚の営みに寄り添い、学校全体での授業改善に励んだ経験。さらには、これまで挫折として目を向けてこなかった高校時代の苦い記憶。これ

らは単なる過去の記録ではなく、省察という光を当ててすることで、新たな教育的価値を創出する貴重な財産となった。自身の葛藤や決断を捉え直す営みは、これまでの歩みを肯定すると同時に、次なるステップへの確かな足場となったのである。

対話と協働がもたらす化学反応

そのような省察も、一人の思考に留まれば独りよがりなものになりかねない。本大学院で出会った多様な背景を持つ院生との対話、そして勤務校の同僚との協働が、私の凝り固まった思考を解きほぐしてくれた。

異なる視点から投げかけられる問いに真摯に向き合い、自らの実践を再度問い直し、言語化していく。そのプロセスこそが、個人では到達し得なかった深い学びへと私を導いてくれた。他者との語り合いは思考を明瞭にし、知の共創を可能にすることを、身をもって実感している。

マネジメントの実践者としての現在地

現在の私のマネジメントに目を向けると、理想には遠く、まだまだ入り口に立ったばかりである。私が目指すのは、生徒と教師がそれぞれの個性を發揮し、生き生きと輝ける学校組織の構築である。多様化が進むこの社会において、多様な魅力を持つ学校組織の構築は必須である。生徒や教師一人ひとりの可能性を信じ、組織としての相乗効果を生み出すことは容易ではない。しかし今の私には、本大学院で磨き上げた「省察」という武器がある。

ここで得た知見と情熱を一過性のものとせず、生涯にわたる自己研鑽へと昇華させていくこと。また、

対話によって私自身の思考が解きほぐされたように、次は私が現場において、先生方が安心して本音を語り、知恵を出し合える環境を整える存在であること。それこそが、学びを支えてくださった方々への感謝の示し方だと考えている。

最後になりましたが、温かくご指導いただいた先生方、ともに語り合った院生の皆様、小浜中学校の教職員の皆様、そしてこの学びを支えてくれた家族をはじめとしたすべての方々に深く感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

教職大学院で学んだからこそ

学校改革マネジメントコース2025年度修了生(1年履修) 岩佐 直美

「子ども教職員も一人一人が輝き、みんながワクワクできる学校づくりへの挑戦 ～『働きやすい学校』から真の「働きがいを感じられる学校」へ～」が私の長期実践研究報告のタイトルである。

この一年間の取組で、学校が大きく変わったとは言えない。しかし、教職大学院で一年間（事前履修を含めると二年間）学ばせていただいたことで、自分がどんな学校を目指しているのか、そのために何をすべきか、大切にすべきことは何かということが明確になり、長期実践報告を書き終えた今でも、今年度やりきれなかったことを来年度どのように実現するかということに関する思いがふつふつと湧いてくる。

教職大学院で学んでいなかったとしても、校長として目指す学校づくりを進めていただろう。しかし、自分のやりたいことが思うように進められない困難が続く中でも、諦めず実践を重ねていくことができたのは、教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブルなどで、自分とは異なる立場の方や同じような悩みを抱える方、ファシリテーターの先生方と対話をする中で、自分では気付かなかった視点を与えていただいたり、自分が取り組んでいることに対して価値づけてくださったりしたおかげだ。それが次へ踏み出すエネルギーとなった。

私の勤務校では、令和5年度に急激に働き方改革が進められた。教職員にとって働きやすい学校にはなったものの、令和6年度に校長として赴任した私から見ると、先生方は、毎日しっかり子どもたちと

向き合い、やるべきことはしっかりやっているものの、新しいことを生み出そうとする余白や、子どもを主語にして「もっとよくできるのでは」と考えるエネルギーが弱まっているように感じられた。

そこで私は、今年度目指す学校の姿として「子ども教職員も一人一人が輝き、みんながワクワクできる学校」を掲げた。「子どもたち一人一人が輝き、ワクワクできる学校」をつくるためには、授業づくり、居場所づくり、活躍の場づくりが大切だと考え、研究組織として3部会を立ち上げた。そして、授業づくり部会、ふれあい部会、特活部会の3部会が、目指す学校づくりを実現するためにどのように進めていけばよいのか、一人一人の教員が、それぞれの立場で自分事として考え、提案し、同じ部会の仲間と実現することで、学校運営に参画し、一人一人の教員が自己有用感や働きがいを感じることにつながるのではないかと考えた。新しい提案はなかなか生まれなかったが、「日之出っ子音楽会」では、出来映え重視ではなく、「子どもが主役」の音楽会にしようということで、各学年の発達段階に応じて、子どもたちに任せ、子どもたち自身が考え、仲間と一つのものをつくりあげる過程を大切にしたい。本番、子どもたちが自信をもって、楽しみながら思い切り表現し、大きな達成感を味わった姿を見て、「子どもが主役」の大切さを本校の教職員も改めて感じたようだった。

また、学校行事だけでなく、授業においても「子どもが主体」の授業づくりに取り組んだ。一年間を

通して自分のテーマをもち、一人一人の教員が授業づくりに向き合ってほしいと考え、「一人一研究」に取り組み、実践と省察を繰り返し、校内や中学校区で、仲間と実践について語り合うことで、授業力向上を目指した。授業づくりは、一人で行うのではなく、互いに授業を見合うことで新たな気づきをもらい、学び合える教職員集団づくりができるとよいと考えていたが、今年度は人手が足りず、どの教員もギリギリのところまで踏ん張っている状態で、授業を見合っ語り合うということが当たり前にはならなかった。来年度は、どんな仕組みを作るとそれが実現するのか考えていきたい。

今年度の一番の課題は、私が旗振りをしすぎたことだ。本来ならばビジョンを示して、あとは信頼し

て任せるのが管理職の役割だろうと考える。教員同士の対話の場「カ・タ・リ・バ」も行ったが、対話の意味や必要性を感じてもらうところまでは行けなかった。来年度は、目指す学校づくりのために、一緒に知恵を絞ら合い、進める仲間を増やすことが目標だ。教職員がやらされ感なく、楽しみながら自分たちの学校を自分たちでつくっていると感じられるようにしていきたい。それが、教職員にとっても真の働きがいを感じられる学校づくりにつながると思っている。私に校長として残された時間はあと一年。「子どもも教職員も一人一人が輝き、みんながワクワクできる学校」をつくるために、組織づくりや仲間づくり、教員同士の対話、互いの尊重と思いやり、感謝の気持ちを大切にして、一歩ずつでも歩みを進めていきたい。

続・長期実践研究報告

学校改革マネジメントコース2025年度修了生 宮野 雅樹

もうすぐ所属校での2年目の卒業証書授与式を迎えようとしている。東京の桜の開花予想と同日の卒業式は、きっと卒業生の素敵な笑顔や涙、保護者の温かいまなざしに包まれるものとなるだろう。副校長としての私の役割は、式の始まりと終わりを告げること。私が宣言しないと式は始まらないし、閉まらない。自分の緊張感をほぐすために、いつもそんなことを思いながら、式中にどんなことが起きようとも動じずに、淀みなくその宣言をすることに毎回注力しているが、今年度のそれは、私の教職大学院の修了と重なることもあって、思いはいつも以上に厚く（熱く）なってしまうようである。

所属校での学び、実践がこの教職大学院でのメインの課程であることを捉えるのに、院生1年目のはじめは戸惑ってしまったのを記憶している。過去の授業研究実践や学校運営組織の中で行ってきた取組を振り返ることはできても、今の立場で何を実践と呼べるのか。副校長業務は、ルーティンな毎日の「作業的」な業務が多く、言ってみれば毎日の業務をこなしている、ということが多かった。それでも、多岐に渡る幅広いタスクが次々とやってくるので、いかに効率的、効果的、さらには学校予算と向き合っ経済的に行うことができるのかは、この立場の者の手腕にかかっているのだと思う。

ただ、それだけでは、学校運営に関する業務、しいては学校改革につながる業務と言えるのだろうか。月ごとの大学院のカンファレンスが進み、過去の実践を振り返るとともに、今の自分の行っていることを捉え直してみた。副校長として、学校運営にどの角度から積極的に実践を進められるのだろうか、私がこれまで行ってきたことの延長線上に今の業務があるとしたら・・・と考えると、教育課程に関すること、授業改善を進めるための教師力、授業力の向上を学校全体で図ること、それが最も自分らしいというか、私のできることなのではないだろうかと考えるようになった。そう考えるようになったのは、月間カンファレンスで出会い、対話をした方々からの影響が大きい。皆それぞれの勤務校で、それぞれの立場ながら、学校運営に携わる業務に挑戦し続けているのである。立場や役職、校種が異なっている、学校教育をよりよくするために、という最上位目標へ向けた志は同じだろうと感じることができた。

私は、現在の勤務校ですぐにでもできることとして、2つのことを実践しようと決めた。一つは、私の思いや考えを教職員に届けるための「副校長だより」を定期的に発信すること、そしてもう一つは、有志で集まり、校内において対話の機会をもつコミュニティを立ち上げることである。

一つ目の「副校長だより」については、毎月2回程度の定期発信とし、学校環境に関すること、授業改善に関すること、児童理解、地域イベント、授業における子どもの姿の紹介、などある程度固定したテーマを循環し、メッセージ性をもたせた内容にした。分量を多くすると教職員が読むのもおっくうになると考え、A4横置きで半分が写真、半分に記事という非常に文章量は少ないものとして、見出しもつけることにした。本校はクラウド型のネットワーク会議システムを利用しているので、教職員は机上のPC端末からシステムの掲示板を見ることができ、打ち合わせ事項などはそこに掲載している。そこに私の「副校長だより」も掲示し、さらに掲示板のリスト表示にサムネイルで写真と見出しが分かるようにした。「副校長だより」そのものをクリックして開かずとも、サムネイルで見えるので、注目しやすいのではないかと考えたのである。

教職員の受け止め方は、正直なところあまり分かっていない。読んでいるのだろうが、特にリアクションをもらえるわけではないので、反応は手ごたえがないことの方が大きい。私が自らの考えをアウトプットすることは学校組織運営の中でも大事なことだと感じているので、続けることにしている。ちなみに、本校の校長は、最初から賛同してくださり、快く読んでくれるので、毎回紙ベースで渡している。今後私がどの立場になっても、自らの考えを発信する機会を生み出して、教職員へ伝えていきたいと考えている。

二つ目の校内コミュニティについては、私が大学院1年目の9月に構想、提案し、11月に第1回目を実施することができた、奈良小版ラウンドテーブル「Nara Cafe」である。名称のヒントは、月間カンファレンスで聞いた他の方の実践から着想を得て、内容も参考にした。なぜこのようなコミュニティを設立しようと思ったのかは、校内の教職員の学ぶ意欲や意識向上の必要性を感じたからである。詳細は長期実践研究報告書に書き記しているので割愛するが、教員が自主的に学ぶことや自身の実践を日々深く振り返ることの習慣化を図り、それを実現するためのアプローチの一つとして取り組んできた。

このことは、私自身が過去に校内メンターチームの立ち上げ、実践、運営を20代、30代のときに所属した2校において取り組んできた経験が大きく裏支えしている。教職大学院では、このときの経験を省察することがかなり多くなった。さらに、2年間の夏季集中講座で初めて読むことになった、『コミ

ュニティ・オブ・プラクティス(エティエンヌ・ヴェンガー他)』や『学習する組織(ピーター・M・センゲ)』との親和性を見出すことができ、実践当時の自分には考えることにも及ばなかったコミュニティの発展や衰退、「チーム学習」や「共有ビジョン」という理論まで関連付けながら、当時の実践をより深く振り返ることができたのである。教職大学院でお世話になった大学院の先生方や同じ院生であり、教職の先輩方からの話も自身の実践を省察し、今にどう生かしていくかということをもっと推し進める原動力になっていった。だから私は、月間カンファレンスを行うと、自分の考えや今の立ち位置を再確認、整理することができ、明日からこんな意識をもっていっただろうか、というやる気をもたせてもらったのである。

そして、長期実践研究報告を書くことで、改めて過去の自らの経験、実践には、人との出会いが大きく関わり、節目ごとに判断、意思決定をする場面に置かれていたこと、運よく出会う先輩方に恵まれ、たくさんの刺激を受けてきたことなどを振り返ることができた。この記録を今の時点で整理して書くことができたことは、私の教職人生においてとても価値のあることだと感じている。そしてさらに長期実践研究報告には、少し先のことを思い浮かべ、私が今後どのように学校運営を行っていくか、イメージをしながら、理想の学校運営について書くこともできた。数年後に改めて読み返してみれば、このときは考えが甘かったということもあろうかと思うが、根幹にある思いは変わらないだろう。そしてさらに数年後、あるいは十数年後に、この続きを書くことを想定し、今後の日々の実践に向き合いたいと思う。

副校長業務は、ルーティンが多いと感じていたのは、私のこれまでの正直な感覚であった。ただ、2年間の教職大学院での学びを経て、この考え方に変化が生じている。仮に同じ業務をしているようでも、自分自身の考え方、捉え方、そして振り返り方によって、創造性のある業務になることもある。常に改善できることはないか、もっと発展的に行うことはできないかなど、思考を巡らしながら業務に向き合えば、様々な可能性が開けてくるのではないか。そして私自身が学び続ければ、今後どのような学校へ努めることになっても、クリエイティブに動くことができるだろうと思っている。

末筆ながら、教職大学院の先生方には、月間カンファレンスやラウンドテーブル時のセッション等で私の話を適切にファシリテートしてくださり、自分でも気が付いていなかった視点に気付かせていただ

き、感謝している。東京サテライトの先生方には、スケジュール調整が必要な時においても、特に親身

になって相談に乗っていただいた。改めて感謝申し上げます。

次の空へ

学校改革マネジメントコース2025年度修了生 小林 千恵美

卒業式は、一年を締めくくる大きな行事である。その中で「音楽」が担う役割は大きい。なぜ、儀式の中で「音楽」が使われるのか。長期実践の第3部で「音楽」について省察したことが、卒業式の指導にもつながった。久しぶりの全体練習の中で、私自身も多くの学びを得ることができた。今回の行事も含め、日々の省察の中で、理論と実践が往還しているという実感を得られることが、この2年間の学びの証であると思う。

今回の卒業式までの道のりにも、さまざまなドラマがあった。歌う曲の選曲の過程での児童とのやり取り、練習における担任との連携。私の独りよがりな意見で進めてしまい、連絡・報告・相談を怠ったと反省する場面もあった。そうした中で最も重要だったのは、管理職や担任の思い、式の指導に当たる教師の思いを共有することであった。

このような大きな行事では、「協働」が必然となる。それぞれの「観」が異なるからこそ、相手の立場を考え、それぞれの文脈や背景を推測しながら対話を重ねなければ、重なりを見出して前に進むことはできない。言葉を選んで伝え、それに対して返ってくる言葉に耳を傾ける。これ以上対話が難しいと感じたときには、思いを別の人に聞いてもらえる安心できる環境にも支えられながら進んできた。今回も、best を目指し、better を追い続ける日々であった。

一人一人がそれぞれの思いを抱えて歌の練習に臨む中で、全体への言葉かけについても考え続けた。

「自分の限界を決めずに進もう！」

「私の座右の銘は『向上心』なの。」

このように、価値を押し付けるような言葉を発してしまい、後から反省することもあった。同時に、それは自分自身を鼓舞する意味もあったのだと思う。しかし、語気を強めて伝えることで、響かないどころか反発を招くこともある。

そんなとき、率直に意見をくれた全体指導の先生や、担任たちがいた。

「やる気がないわけではないと思うよ。」

「あまり詰め込まない方が良い気がします。」

「ハッパをかけすぎるのは逆効果だと思います。」

これらの言葉は、児童の思いを尊重する担任の言葉として、私の心に強く響いた。

「伝えてくれてありがとう。」

「本音の声が届いたかった。」

そう思いながらも、その上で自分が伝えたいことをどのように伝えるべきか、考えあぐねる毎日であった。昨年度みた映画「小学校～それは小さな社会～」の卒業式の指導の場面とも重なった。この映画は日本の学校教育について考えるきっかけになった。

今回、外部の視点を取り入れ、そこから学んだことをつなげていくことができたことは、私にとっても児童にとっても大きな推進力となった。卒業生には「人との出会いをプレゼントするね。」と伝え、進学先の中学校の先生から指導を受ける場を設定した。もちろん、それは私自身にとっても大きな学びであった。

その中学校の先生は、私が尊敬する合唱指導の大家である。音楽の捉え方に深みがあり、本気の指導に児童たちもどんどん引き込まれていった。私は、自分の教材研究や指導の甘さを痛感した。また、授業を受ける児童の姿を俯瞰して見ることで、児童支援の面でも多くのことを考えさせられた。

卒業にあたり、担任とカリキュラムの話ができたことも、この2年間での自分の成長の一つであった。6年生の国語教材に、鴻上尚史さんの「考えることと悩むことは違う」という内容がある。卒業式の歌の練習で「高い声が出ない」と悩むだけでなく、「高い声を出すために具体的に実行できることは何かを書き出す活動とつながる」と担任に伝えると、共感してくれた。

さらに担任からは、他教科とのつながりの話も返ってきた。社会科や英語でも、中学校や将来へと向

かうこの時期の学びにつながりを感じる教材が扱われているという。こうした感覚が、子どもの学びに文脈を生み、学びの質を高めていくのだと思う。研究主任として以前から取り組みたいと考えていたカリキュラム・マネジメントが、少しずつ実現し始めていることを感じた。

次年度のスタートでは、生活科や総合的な学習の時間を軸としたカリキュラムを基に、カリキュラムをデザインすることを進めていきたい。紙面上で単元を入れ替えたり線をつないだりすることは、あくまでも見える化のための手段である。

卒業式の式辞では、卒業生の2年にわたる「幸せプロジェクト」での数々の取組が紹介された。それは同時に、一人一人の子どもを輝かせようとしてきた教師への価値付けでもあったと思う。

このように、職員室でも日常的に、雑談や全体研究会の中で子どもの実際の姿を中心に語り合い、価

値を確かめ合う場面や精査する場面が積み重なっていくことを願っている。

卒業式後、担任が挨拶の中で「子どもを信じることを続けた」と語った。その言葉が、私の心に深く残った。教師同士も同じように「信じ合う」ことを続けていきたい。それは、私自身の課題でもある。

在学した2年間、温かな職員室と大学院での学びがあったからこそ、悩みを乗り越え、これからも教師を続けていこうという気持ちになれた。今、卒業の時を迎え、松本の職員室の皆さん、大学院で出会った先生方やグループメンバー、そして教職大学院での学びを助めてくださった先生に、感謝の思いでいっぱいである。

今の心境は、卒業生が歌った弓削田健介 作詞・作曲「次の空へ」の最後のフレーズにぴったりだ。

「ありがとう」を抱きしめて 歩こう 次の空へ

教職大学院を修了して

学校改革マネジメントコース2025年度修了生(1年履修) 嶋田 美幸

教職大学院で長期実践研究報告書を書くという営みは、「自分の人生と向き合うこと」そのものだった。時には向き合いたくない過去や、思い出したくない失敗と対峙する必要があった。負の思い出と向き合うことはつらいものだ。当時の未熟さを追体験する中で感情が揺れ、思い出に蓋をしたくなる瞬間もあった。しかし、書かなければ報告書は仕上がらない。勇気を出して向き合い続けていると、いつの間にかそこに意味を見出すようになってくる。失敗をただの失敗のままにしておくことができなくなる。過去の体験に秘められた価値が浮かび上がってくる。そうしていくうちに、負の思い出が価値を帯び、心が前向きになっていく。長い時間をかけて人生をふり返るうちに、「自分のやってきたことすべてに意味があり、それらは明日へつながるものだった」と思えるようになる…。教職大学院での活動によって、そんな不思議な体験をすることができた。負の思い出に蓋をして、二度と思い出さないように隠しておくこともできるが、報告書を書き、カンファレンスやラウンドテーブルで語り合う中で、負の思い出が自分の成長につながっていることを実感した。

不思議な体験はもう1つあった。これまでばらばらに積み重ねてきたと思っていた実践がつながり、

まるで誰かが作り上げたシナリオ通りに進んできたように思われる経験だ。勤務校や職場が変わることで生徒やともに働く教職員だけでなく、立場や仕事内容も変わった。その時々自分なりに一所懸命に向き合ってきたが、実践のつながりを感じることはなかった。しかし、報告書を書く中で、過去のある時点での実践を経て得た見方が別の時点につながることに気づき、語り合う中で過去の自分の考えを今の自分につなげて捉え直すことができた。これまでの実践は個々に散らばっているように思えたが、報告書を読み返すと、自分の人生が1つの物語のように、主人公「私」が歩んできた軌跡が見えてくる。まるで誰かが創作した作品の中にいるように感じる。

その物語の登場人物も筆者も校正も編集も「私」に他ならない。その読者として、もっと面白い物語を求める「私」もいる。物語を面白くしていくのも、つまらなくしていくのも私自身。同じ私が創っていくのなら、面白い物語になるように歩こう。長期実践研究報告は書き上げてこれで終わりではない。これからもずっと、読者の私が期待するわくわくするような物語を創っていこう。私にしか創れないオリジナルストーリーがやがて他者を巻き込み、社会をよりよくしていくと信じている。

1年履修という短い期間だったが、とても濃く充実した時間を過ごすことができた。教職大学院に踏み出さなければ絶対に出会わなかった方々と話できた機会は貴重だった。他県や海外も含め、大きな熱量を抱く方々に刺激を受け、明日への活力を得る

と同時にたくさんの視点や気づきを与えられた。これまでに関わってくださった教職大学院のスタッフのみなさま、院生のみなさま、本当にありがとうございました。

ともに学べたことへの感謝をこめて

学校改革マネジメントコース2025年度修了生 平良 優

1 はじめに

2年間にわたる福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースでの学びが、ここに一つの区切りを迎えました。在職のまま大学院で学ぶということは、現場と理論の間を行き来し続けることであり、容易ではありませんでした。

しかし今、このコースでの学びを振り返るとき、その困難さ以上の豊かさを実感しています。ここに、2年間の歩みへの感謝と省察を記します。

2 長期実践報告書との格闘

「教師は迷う一問いが導いた探究と省察の二重螺旋」と題した長期実践報告書は、私の23年間の教育実践の総括であると同時に、自らの省察の深化を記録した作業でした。

書き始めたとき、私は「まとめる」つもりでいました。しかし書き進めるほどに、まとめることの難しさと、まとめきれない実践の中にこそ実践の豊かさが宿ることを発見していきました。

D. ショーンの「省察的实践者」の概念と向き合い、P. センゲの学習する組織の理論を現場に重ね合わせながら、私が最終的に辿り着いたのが「共鳴的省察」という概念でした。これは、ショーンの内省の枠組みを日本の教育的文脈へと拡張し、教師同士が互いの省察をぶつけ合い、共鳴させることで生まれる新たな気づきの様式です。この概念は、この報告書のなかでしか生まれ得なかったものだと確信しています。

3 大学院での学びと現場への還元

22名の児童と12名の職員からなる狩俣小学校という小規模校の教頭として、組織学習の理論を日々の学校運営に活かすことは、私にとって切実な課題でした。E. ウェンガーの実践共同体論を援用しながら、職員室という小さなコミュニティをいかに「学び合う場」へと変容させるかを模索し続けまし

た。大学院の学びは、その模索に言語を与えてくれました。

理論と実践の往還という言葉は、大学院教育の場ではよく使われます。しかし私が経験したのは、単なる往還ではなく、理論によって実践の意味が書き換えられ、実践によって理論が肉声を帯びていくという、より複雑で豊かなプロセスでした。

この2年間の学びが、私を「実践する教頭」から「省察する実践者」へと育てたように感じています。

4 これからの自分へ——修了を出発点として

このコースを修了しても、問いは終わりません。むしろ、ここから始まる問いの方が多くなるような気がしています。「共鳴的省察」という概念を、論文の中に閉じ込めず、現場の言葉で語り直し、共に働く先生たちに届けていくこと。それが、この2年間の学びに対する私なりの返礼だと思っています。

教師が迷うことを肯定できる職員室をつくりたい。省察が文化になる学校をつくりたい。その願いは、大学院に入る前からありました。しかし今は、その願いに方法と言葉が加わりました。宮古島の小さな学校から、少しずつ、丁寧に、その実践を積み重ねていきます。

5 先生方へ、同期の皆さんへ

ご指導くださった先生方に、改めて深く感謝申し上げます。遠く沖縄の離島から通い続けるという物理的な制約のなか、常に温かく、ご指導いただきました。また、長期実践報告書のご指導においては、粗削りな原稿であるにもかかわらず、丁寧に向き合ってくださいました。先生方の言葉は、今も私の省察の中に生きています。

共に学びを深めた同期の皆さん。それぞれの現場を抱えながら、それでも学びを諦めなかった仲間たちの姿が、私の背中を何度も押してくれました。異なる校種、異なる地域、異なる悩みをもつ皆さんと

同じ空間で学べたことは、何にも代えがたい経験です。

皆さんの存在が、私という教育者を作ってきました。その学びの連鎖を、狩俣小学校の職員室から、

宮古島の教育現場から、引き続き紡ぎ続けていく所存です。

本当に、ありがとうございました。

修了式を前に、・・・

学校改革マネジメントコース2025年度修了生 山口 武敏

本教職大学院での2年間は何だったのか。

教職大学院で学んだという証が欲しかったのだろうか。

初めのうちは、そうだったかもしれない。しかし、この思いが一番だったか。

ちがう気がする。では、何か。修了式を明日に控えて考える。

思い浮かんだのは、エネルギーに出会えたことである。

エネルギー！？

抽象的なので説明すると、毎月の合同カンファレンス等で「何かしたい」「これ悩みなんだよねえ」等と初めて出会ったかもしれない相手とエネルギーをぶつけ合えたことがわたしの教職大学院だったかもしれないという考えに至ったということである。

そんなの、オンライン越しにしなくてふだん一緒に働いている同僚とすれば、毎日だってできるでしょ。そんな声が聞こえてくる。

でも、いつも一緒に働いている同僚とは「いつも見ている子供たちにこれからどうなってほしい」とか「自分たちは何のために子供たちを指導しているの」なんて、口から出てこない。「あれはどうする」「今これが問題だからこう対処しよう」ばかり。合同カンファレンス等で一緒に活動する院生やファシリテーターの先生方とは正直言って利害関係がないから、話しやすい、否定されないという側面はある。でも、同じ職場にいて日々の指導や支援の“根っこ”について確認し合わないのはそれでよいのでしょうか。みんな同じことを思っているのかな。「君、そんなこと言わなくなって分かるでしょ。」なんだろうか。「そんなことを考えている暇があったら、この仕事を進めようよ。」と叱られるかもしれない。

この教職大学院には、少なくとも、エネルギーのぶつかり合いやエネルギーのおすそ分け、エネルギー

の交換等、参加した一人一人のエネルギーにあふれていた。わたしは専らオンラインだったが、画面越しでも、お相手からのエネルギーはよく伝わってきた。オンライン故のよさもあって、南は沖縄県から東は東京都の方まで県内の教職大学院では出会う機会は少ない全国のエネルギーをもった方と時間を共にすることができた。職業上の身分を超えて、話を聞いてもらった。教員だけでなく、保育園や幼稚園、一般企業の方とも出会えた。しっかりしたことが言えなくても、“そのまま”をぶつけることができる。ありのままの自分で、純粋な、ピュアなエネルギーに出会えるのがこの福井大学が主管の連合教職大学院であった。

この4月から、ここの合同カンファレンスに参加することがなくなると思うと、ちょっと寂しい気持ちになる。この前の2月のラウンドテーブルに本教職大学院の修了者と一緒することがあり、その方はこの教職大学院のことを「デトックス」と評していた。わたしもラウンドテーブルに出ようと今、思っている。合同カンファレンス等での出会いを通して、自分のテーマについて相談したいなと思っている人、勤務校にお邪魔して実践の様子を見ることができないかなと考えている学校が見つかった。アプローチできないかなと考えている。

近頃悶々とした日々が続いている。その中でわたしがたどり着いたのは、わたしは特に大学や就職期の頃から、「エネルギーをぶつけられるものに出会いたい」と思ってきたなあということである。テーマは、極端に言えば、どんなことでもいいのかもしれない。今わたしのエネルギーを向ける中心は学校教育になっている。21世紀のキーワードは「挑戦」と「仲間と」である。これらの姿は「生きたい・知りたい・仲間になりたい」という3つの大きなモチベーションとして子供たちに元来備わっている力である。でも、今の学校教育には「挑戦」「仲間と」の大切な視点が学校の大小さまざまな教育活動に行きわたっていない。教職員の共通認識になっていない。

今所属している組織の校長が次のように言っている。「学校教育目標は往々にして記憶に残りにくいものである。しかし、この3年間変わらず掲げたこの学校教育目標は本市一覚えやすいものだ」と自負している。」学校教育目標は覚えやすいものでありたい。その通りである。昨今さまざまな教育施策が打ち出されるたびに、いろいろなキーワードが出てきて、正直、現場はどこに向かっていけばよいのか戸惑っている。「これを目指すんだ!」というものを一旦一学校内で、一市町村学校内で整理してみたらどうだろうか。そして、「挑戦」なら、「自ら進んで」とか、「仲間と」なら、「目標に向かって創り出す」などと誰もが同じイメージをもつことのできる表現に落とし込んで、目標を共有する。みんながこれならみんな目標を共有できると言える段階まで「煮詰める」。この2つの作業が大小どの組織にも大切であると、この2年間を含めたこの数年のわたしの「挑戦」で行き着いた。これが何より大切。この2つの作業ははじめにできる場合もあるし、挑戦しながら、仲間と取り組みながら、できていく場合もある。いずれにしても、組織のどのメンバーもが目指す“山”を見据える。後は、目の前の子供の実態や自分自身のもち味を生かして取り組んでもらう。「目標は同じ。方法はそれぞれで。」この原則をしっかりと組織に根付かせる。今は、これが反対になっていて、「方法は同じ。目標はばらばら。」これでよいでしょうか。答えは明らかだと思う。

話がちょっと脱線したが、わたしが今エネルギーを注ぎたい学校教育について特にエネルギーが集まっているのが、この2年間お世話になった福井大学連合教職大学院であった。

ああ、ここの連合教職大学院のような環境を身近に創り出せないものだろうか。

もしかすると、使っている表現こそちがうけれど、今の職場にもこれからの学校教育の“根っこ”を意識して働いている人がいるかもしれない。福井県に限らず、ここ富山県にだっているはずだ。

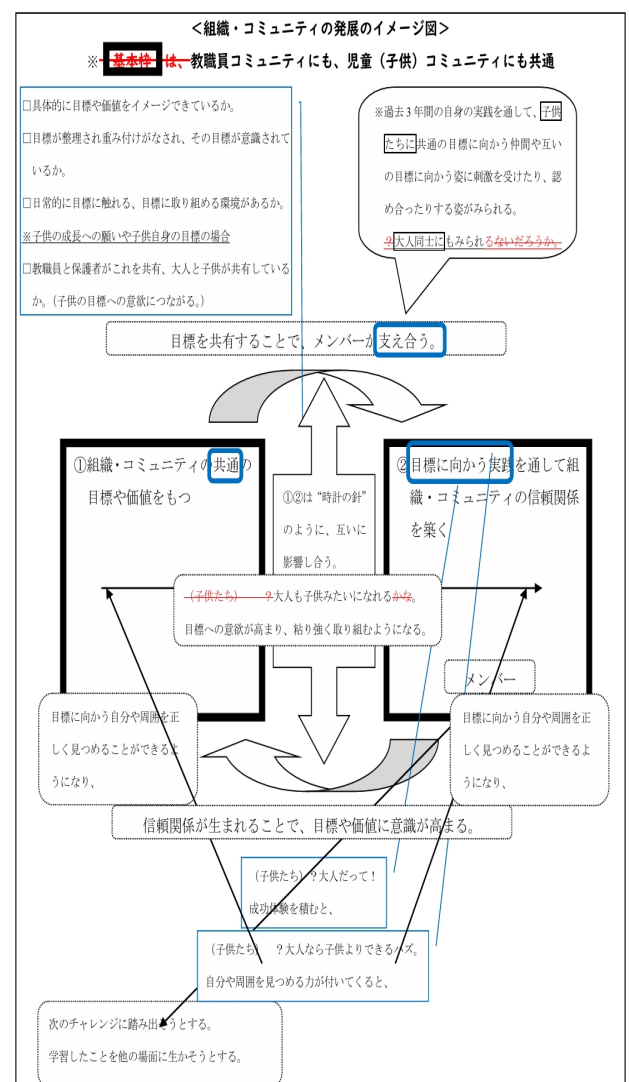
「エネルギーに出合える」場所、福井。

この2年間を“思い出”にするか、“きっかけ”にするかは自分次第か。

最近、わたしは、世の中が変わるために、大変でも自分が突破口となろうという考え方だけでなく、世の中の動きをよく見て、そこにあるエネルギーを生かすことで、世の中が変わっていくという考え方もあるのではないかと思います。こう

した考え方を教職大学院での研究と実践のテーマの設定場面に置き換えると、「自分のやりたいテーマに取り組む」ことは元々エネルギーがあるのでがんばれる。但し、“動く”までに時間がかかるし、“動かない”かもしれない。だから、学校改革マネジメントコースを選んだ方はそのテーマを、自分のやりたいテーマもいいけど、「今の職場が求めるテーマ」に設定することで、周囲の協力も得られ、事が“動きやすい”のではないかと思います。そう考えると、学校がよりよく変わっていくためには、管理職のトップダウンと教職員のボトムアップの両面が必要なのではないか、と明日の修了式を前に思う。

みなさん、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。下記の図は、わたしが取り組んだテーマに対して明らかになってきたことをまとめたものです。どうか、わたしの長期実践報告書を読んでいただき、ご意見をいただくと幸いです。



この2年間のカンファレンス等でご一緒させていただいた院生やファシリテーターの先生方、そして、この教職大学院に縁あって集まったみなさんにこの場を借りて、心から御礼申し上げます。そして、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

「人間って、わたしを含めて、本当に感情的な生き物だなと思います。これが世界をつくり、衝突を生む。」仮に目標がずれていても組織は動く。本当に

人間の世界は不思議である。でも、公立の学校はどうあればよいでしょうか。わたしの、「人の一生と学校の関係」についての問いはまだこの先も続いていくように思います。「これからを生きる子供たちにわたしたちができることは何か」、「学校の役割とは、公立学校の役割とは何か」をこれからも問い続け、次のラウンドテーブルに参加したいと今、思っている。



修了生に贈る言葉



出会いの中で広がった学び

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

川嶋 美咲

修了生の皆様、ご修了おめでとうございます。皆様と同じ場で学び、時間を共に過ごすことができたことを心からうれしく思っています。日々の授業や対話の中で、多くの学びや気づきをいただきました。こうして修了される皆様に、感謝の気持ちとお祝いの言葉をお伝えしたいと思います。

私にとってこの一年間は、新しい出会いや学びに満ちた時間でした。同時に、自分の考えや力の足りなさに気づき、悩むことの多い一年でもありました。授業の中で意見を求められたとき、自分の考えが十分に言葉にならず戸惑うこともありました。また、教育について深く考えれば考えるほど、簡単には答えが出ない問いに向き合うことの難しさも感じるようになりました。しかし、そのような迷いや不安の中でも、修了生の皆様の姿が大きな支えになっていました。授業での発言や対話の様子を見ていると、すぐに答えを出そうとするのではなく、それぞれの考えを丁寧に聞き合いながら学びを深めていこうとする姿勢が感じられました。その姿から、学びとは正しい答えを早く見つけることだけではなく、問い続けながら考えを広げていく過程そのものに意味があるのだと気づかされました。また、修了生の皆様が語ってくださった経験や考えは、私にとって大きな学びとなりました。実際の教育現場での出来事や、そこで感じた悩みや葛藤について率直に話してくだ

さる姿から、教育という営みが決して単純ではなく、多くの思いや試行錯誤の中で成り立っているのだということに改めて感じました。そして、そのような経験をもとに、自分の実践を振り返りながら学び続けようとする姿勢に深い尊敬の気持ちを抱きました。

授業や日常の会話の中で、何気ない言葉に励まされたこともありました。自分の考えに自信が持てず、不安を感じていたときに、温かい言葉をかけていただいたことがあります。その言葉は決して特別なものではなかったかもしれませんが、私にとっては大きな力となりました。学びの場において、人と人の関わりがどれほど大きな意味を持つのかを実感した瞬間でもありました。また、修了生の皆様は、自分の考えを大切にしながらも、他者の意見に耳を傾ける姿勢を常に示してくださいました。その姿を見て、学びとは一人で完結するものではなく、人との対話を通して深まっていくものなのだと感じました。異なる立場や経験を持つ人たちと語り合うことで、自分の視野が広がり、新しい気づきが生まれる。そのような学びの豊かさを、皆様との関わりの中で実感することができました。

この一年間の学びを振り返ると、知識を得ることだけではなく、自分の考えを見つめ直し続けることの大切さを学んだように思います。教育について考

えるとき、明確な答えが見つからない問いに出会うことも少なくありません。しかし、その問いから目を背けるのではなく、考え続けることこそが学びにつながっていくのだと思います。そのように考えることができるようになったのは、修了生の皆様の姿から多くのことを学ばせていただいたからです。皆様が学びに向き合う真摯な姿勢や、仲間と語り合いながら考えを深めていく姿を見て、私自身も学び続けていきたいという気持ちが強くなりました。

これから皆様は、それぞれの場所で新しい歩みを進めていかれることと思います。きっとこれからも、さまざまな出会いや経験の中で、新しい学びを積み

重ねていかれることでしょう。皆様がこれまで培ってこられた学びや経験は、これから関わる多くの人々にとって大きな力になるのではないかと思います。私も、皆様との出会いの中で得た学びを大切にしながら、これからも自分自身の学びを深めていきたいと考えています。迷うことや悩むことがあったとしても、その一つ一つの経験を大切にしながら、少しずつ前に進んでいきたいと思っています。

最後になりますが、修了生の皆様と出会い、共に学ぶことができたことに心から感謝しています。皆様のこれからのご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

ともに学んだ一年への感謝

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

杉畠 和奏

修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。皆様が晴れてこの日を迎えられることに、心よりお祝い申し上げます。

私は先日、附属特別支援学校での今年度のインターンシップを終えました。振り返ってみると、入学当初は手探りだった子どもとかかわりも、クラスや学部、大学の先生方のご指導のおかげで、次第に楽しみながら行えるようになりました。例えば、入学当初の私は、『待つ』ことを大切に子どもとかかわりたいと考えていました。しかし実際には、「待つ」だけでなく、子どもの様子に応じて適切なタイミングで手を差し伸べたり、声をかけたりすることも大切だと感じるようになりました。そうした教師の関わりが、子どもの「できた」を支えるのではないかと考えるようになったのです。日々の中で、子どもの成長に触れたり、心を通わせたりする瞬間に、大きな喜びと楽しさを感じていました。

また、大学院に入学してからのこの1年間を振り返ると、教育について考え、揺さぶられ、考えがまとまりかけては再び揺さぶられる、そうした日々の連続でした。そして、その節目にはいつも、修了生の皆様との語り合いがありました。

日々のかかわりの中で悩んだときも、子どもの成長への喜びを感じたときも、それを共有する場として1年間私のそばにあったのが金カンでした。M2・

3の先輩方には、金カン全体を通して教育をさまざまな角度から捉え直す機会をつくっていただき、心より感謝しております。

さらに、月間カンファレンスやラウンドテーブルでは、ストレートの院生だけでなく、現職の先生方とも語り合うことができました。また、ALTの先生方と語り合う機会もあり、インクルーシブ教育について、日本の内外双方の視点から捉え直す貴重な経験となりました。

入学当初、私は自分なりの教育観はある程度定まっておき、大きく変わることはないだろうと考えていました。しかし実際には、常に揺さぶられる日々でした。自分の中で確かだと思っていた教育観が揺らぐことは、時に苦しく、先の見えないトンネルの中にいるように感じることもありました。それでも、どこにつながるか分からない中で歩み続けた経験が、今の自分を形づくっているのだと思います。

振り返ると、教育観を更新し、深めていくことそのものが、自分の成長につながっていたのではないかと感じています。

この1年間の学びは、修了生の皆様と共に学んだからこそ得られたものです。大学院での時間は一期一会であったかもしれませんが、ここで得た学びを胸に、またご一緒できる機会を心より楽しみにしております。

これから新たな環境に進まれる中で、迷ったり立ち止まったりすることもあるかと思えます。しかし、その一つひとつが教師としての自分を支える道となっていくのではないのでしょうか。皆様のこれからの

歩みが、実り多く、温かなものとなることを心より願っております。

改めて、ご卒業おめでとうございます。

明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ。

学校改革マネジメントコース1年/東明館中学校・高等学校 林田 龍之介

修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。これまで私たち1年生を温かく導いてくださり、心より感謝申し上げます。

まさに今、この時代は教育改革の大きなうねりが到来しており、明治時代から続く日本の教育構造を根本から改革できる、またとないチャンスの時機を迎えています。社会が目まぐるしく変化し、これまでの「正解」が通用しなくなる中で、学校教育のあり方そのものが問い直されています。

OECD ラーニングコンパスにも示されているように、これからの不確実な時代を生き抜くためには、子どもたち自身はもちろんのこと、子どもに関わる私たち大人の「エージェンシー（自ら考え、主体的に行動し、責任をもつ力）」が何よりも大切になります。本大学院の学校改革マネジメントコースでは、まさにこのエージェンシーを育むことの重要性を学びました。修了生の皆様は、2年間にわたる実践と省察の繰り返しを通して、すでにこのエージェンシーを確かなものとして身につけられているという、大きなアドバンテージを持っていらっしゃるのではないのでしょうか。

私自身は、佐賀県の学校に勤務しながら、福岡からフルリモートという形でこの1年間学ばせていただきました。直接お会いできないことへのもったいなさや、自分の現場のアレ・コレをうまく伝えられるだろうかという戸惑いが当初はありました。しかし、皆様はオンラインという壁を全く感じさせない温かい「聴く」姿勢で私の言葉に寄り添い、「悩んでいい」と率先して自己開示し語り合うお姿で、私を勇気づけてくださいました。

また、皆様の長期実践報告を通して、私の視野は一気に広がりました。佐賀にいながら、福井県をはじめとする関西・中部地方の最前線の実践に触れられたことはかけがえのない財産です。特に私立校に所属する私にとって、公立学校においてもこれほど

までに積極的な組織開発や学校改革が熱意をもって進められているという事実は、深い感銘とともに、これからの教育の未来に明るい兆しを見せてくれました。真の学校改革とは、与えられたシステムを変えることではなく、目の前の同僚や子どもたちと「対話」を重ね、互いのエージェンシーを育み合うプロセスそのものだと学ばせていただきました。

教育改革という大きなうねりは、時に荒波となって教育現場に押し寄せるかもしれません。しかし、本大学院で確かなコンパスを手に入れられた皆様であれば、熟練の船乗りとしてこの波を巧みに乗りこなし、共に船に乗る同僚や子どもたちという乗組員を、新しい時代の教育という豊かな未来へと力強く導いていかれると確信しております。

来年度は、私自身が長期実践研究に向き合う番となります。皆様からいただいた言葉や、画面越しに共に悩み、語り合った時間を原動力として、今度は私自身が対話の輪を広げ、確かな一歩を踏み出していく決意です。

タイトルにはモハンダース・カラムチャンド・ガンディーが言ったとされる名言を書かせていただきました。

「明日死ぬかのように生きよ、永遠に生きるかのように学べ！」

私自身も、「人生一回」をモットーに日々を我武者羅に生きています。そのお陰で皆様に出会うことができました。

最後になりますが、修了生の皆様のこれからのご健康と、それぞれの（教育）現場でのさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。1年間、本当にありがとうございました。

大事にしていることは偶発的に見えてくる

学校改革マネジメントコース1年/横浜市立日枝小学校 石川 和之

ご自身のこれまでの営みを圧倒的な集中力で振り返り、章立てをして、100 ページ前後もの長期実践研究報告としてまとめられた修了生の先輩方。とにかく「すごい」という気持ちでいっぱいです。

何十年というこれまでの経験を、「経験しっぱなし」にせず、様々な出来事、経験、行為から「学び」を引き出し、整理されてこられたこの2年間に、あらためて尊敬するばかりであり、一年後には私自身もその境地に立てるのかどうか不安でもあります。「大事にしてきたこと」、「これからも大事にしていきたいこと」、そのどちらも、自分自身のこれまでの経験を振り返り、その経験の意味を「うわ〜」となるほど頭の中を駆け巡りながら見いだしていく過程。カンファレンスの中で、ファシリテーターや同じグループの先生方に問われる中で、そういった経験の意味を自覚できるようになる「場」は、この一年間ワクワクするものでしたが、いざ自分一人で経験の意味を見つけようとする夏季集中講座や冬季集中講座の苦しさは、本当につらい時間でもありました。その時間、その過程を、修了生の皆様は、圧倒的な集中力で2年間も駆け巡られたのだと思うと、あらためて尊敬の念でいっぱいになります。

大事にしていることは偶発的に見えてくるのではないか、最近私はそのように考えるようになってきました。「偶発的」とはいえ、自分のこれまでの経験を「振り返ろう」としなければ、まず「見えてくる」という状況になりません。「振り返る」という行為は、前提条件として絶対に必要なことです。しかし、振り返ったからと言っても、必ず「自分が大事にしていること」が見えてくるとは限らない。いつ見えてくるか分からない。一日中考えあぐねても見えてこない日もあれば、びっくりするほど押し寄せてくるように見えてくる日もある。そう思うと、大事にしていること、これまでの自分自身の経験の意味、これからも大事にしていきたいことといった、「これだ!」というものへの出会いは、「偶発的」であるように思えてきます。そういった「偶発的な出会い」を見つげられるまで努力を重ねられた修了生の皆様のことを、心の底から「すごい」と思うのです。

私自身には、今も忘れられない12年前のある一時間の授業があります。小学校6年生の社会科。身近な政治について、待機児童の話題をもとに考えを深め合う授業。当時、横浜市で待機児童をゼロにできたというニュースが全国紙で取り上げられていた頃でした。横浜市会の議事録を調べて、「横浜市の政治は市民の声をどのように実現していったのか」という学習問題について、その是非を話し合っていました。元気いっぱいであしやんちゃなところもあるAさんは、その単元での学びに入ると驚くほど本気で学んでいました。直前の授業のノートの振り返りにも、「本当にここまでして待機児童をゼロにする必要はあったのか疑問です」と根拠とともに書いてありました。私は「おそらく次の授業でもこの発言をし、友達の考えを深めるきっかけをつくってくれるだろう」と期待していました。

そして次の授業中。前半からAさんは、友達の発言を聞きつつも腕組みをしながら考え込んでいます。いつもはすぐに挙手をするAさんですが、なかなかその日は手を挙げません。私が指名すると、「まだいいです」と言って、肝心なことは何も話しません。そのやりとりを3回は続けたでしょうか…。そしてついに発言した次の言葉を、私は今でも忘れません。

「みんな、先生、そもそも『待機児童』って言葉、どうしてあるんですか?」

その後の沈黙の5分間。その発言を聞いた友達も私も、頭の中が一度真っ白になり、ぐるぐる、ぐるぐる思考せざるを得ませんでした。あとで振り返ると、Aさんのご両親は共働きで、Aさん自身、小さいころから保育園に通っていて、「できたら可愛い子どもときくらいもっと親と一緒にいたかったのに…」という思いがあったようでした。

Aさん自身、自分のこれまでの経験を振り返り、今の学びとつながった瞬間が、その時間だったのでしょ。つまり、Aさんにとっての「大事にしていること」が見えてきた。授業者の私にとっても、頭の中が真っ白になったそのときのことを振り返ることで、あらためて「予想もしなかったことを考える

子どもの声に耳を傾げることの大事さ」を実感しました。

「大事にしていることは偶発的に見えてくる」、この偶発的な「これだ！」を見つかる瞬間を夢見て、あと一年、がむしゃらに頑張っていきたいです。

エピソードを編みこみ始めている院生より

学校改革マネジメントコース2年/福井佼成幼稚園 大柳世津子

皆様、ご修了おめでとうございます

皆様は始まりの時、何を思い描いておられたのでしょうか。学びの日々は期待に応えた時間でしたか？ 分厚い専門書との格闘や立場の違う方々とのセッションは、自分の立ち位置を再確認する機会とられましたか。私自身、おそらく受験者最高年齢で皆様の仲間に入れていただき、院での学びの日々を刺激的に過ごしています（早生まれの68歳です。今年は高校卒業50年の学年同窓会が予定されています）。このようにゴールを前にしながらも、あがき続ける自分が面白くてたまりません。そして学び舎には、自分を好奇心いっぱいの幼き頃に引き戻してくれる魅力がいっぱいです。様々なカリキュラムは、私の視野を広げ、語り合いは心に愛でる力を沸き立

たせてくれます。現在は認定こども園園長として現場を預かっていますが、子どもファーストの軸を揺るがすことなく進むことに、自信を持つことができます。こんなにも素晴らしい時間を共に過ごした皆様には、仲間として心からの尊敬とエールを贈ります。

「新たなスタートラインは光り輝いています！」

インプットされた学びを思い出や知識の一端とせず、意気込んでおられる姿は頼もしく、未来への明るい展望を感じさせます。皆様がどのようにご自分のストーリーを編まれて行かれるのが楽しみです。プロローグは始まっています。皆様の1ページ、1ページに幸あれと祈っております。



退任にあたって



この学校に戻ってきた意味

元連合教職開発研究科 教授 岩井 秀夫

令和5年4月から3年間、福井大学連合教職大学院、福井大学教育学部附属特別支援学校で仕事をさせていただきましたが、この3月で定年退職することとなりました。昭和61年に附属養護学校で始まった教員人生を、同じこの附属で終えることになったことには、感慨深いものがあります。縁を感じるとともに、このような機会を与えてくださった福井大学に感謝申し上げます。採用から13年（うち内地留学2年）、再び中堅教員として仕事を2年、校長となった最後の3年をあわせて18年間、この学校とともに過ごしました。私はこの学校に育てられたと言っても言い過ぎではないでしょう。すでに、ニュ

ースレターNo.174で私の院生時代の学びについて書きましたが、この子らとの日々の営みにはどんな意味があるのかとか、学校とは何かということを考えさせてくれたのが、この附属特別支援学校でした。ですので、学校だけでなく教職大学院でのこの3年間の学びも私にとっては得がたい経験になりました。（ただ、大学教員としてはあまり役に立てなかったのではないかと思います。）

大学での職務を少しでも果たさないといけないと自分を追い込んで、ようやく、教師教育研究に投稿できたときにはホッとしました。内容は附属養護学校創設期の研究への情熱やそこに流れる精神、創つ

ていこうとした学校文化を自分なりに表現したものです。これを作成するにあたって、附属養護学校の研究紀要第1号を読み返すことになったのは、私にとっては幸運でした。創設期に当時の先生方が考えていたことを知り、自分なりに消化できたこと、それを現在の先生方に紹介できたことが良かったと思っています。

教師教育研究での学びは、文献による本校の研究の歴史の再認識でしたが、その一方で現在進行形の形で進んでいたのが、本校での研究活動でした。先に私の院生時代の学びについて触れましたが、私が抱いていた学校の理想は、思えば理念的だったように思います。しかし、この3年間、研究活動に参加して思ったのが、本校の研究は、一人一人に焦点を当てている、本人の思いを大切にしている、実践から研究を組み立てているということです。今の本校の研究は、教師教育研究で書いた本校創設期の考え方を踏襲したものになっているということです。む

しろ、私がこの学校にいて現場の教員として仕事をしてきたとき以上に、当時の考え方、アプローチに近いのではないかと考えています。

本校は一人一人に合わせた教育をゆっくり、じっくり創り上げており、それは一見、時代遅れになっているように見えますが、実は、時代を先取りしたのものになっているのではないかと考えています。

先に、「本校の研究は創設期の考え方を踏襲したもの」と書きましたが、創設期の研究への情熱や精神、創っていかうとした学校文化は間違っていなかったということだと思います。

33年前の院生時代の論文を読み返し、この3年間の学びとを比較して、情けないほど考え方が変わっていないことが分かりました。独りよがりなのかもしれないと思いつつ、振り返ってみて、この学校に戻ってきた意味を見出すことができたようにも思いました。

探究の現場に学んだ十年

元連合教職開発研究科 教授 柘植 良雄

このたび定年を迎え、およそ十年間携わってきた連合教職大学院での学びを終えることとなりました。振り返れば、特に「学校改革マネジメント」に集われた先生方とともに歩んだ時間は、私自身にとっても「探究的な学び」そのものであり、日々が新たな問いと気づきに満ちていました。

研究主任、学年主任、教務主任、主幹教諭、教頭・校長といった多様な立場の先生方が、それぞれの学校の課題を携え、真摯に向き合いながら改革に挑む姿に触れるたび、学校という場が持つ可能性の大きさを改めて感じてきました。

対話的なカンファレンスを重ねる中で、先生方が自校の実践を丁寧に言語化し、互いの経験を照らし合わせながら新たな視点を獲得していく過程に立ち会えたことは、私にとって貴重で大きな喜びでした。探究とは、決して特別な活動ではなく、日々の実践を問い直し、よりよい姿を模索し続ける営みそのものであることを、先生方の姿勢から学ばせていただきました。次期学習指導要領が「探究」を中核に据える今、学校現場で改革に取り組む先生方こそが、その理念を最も体現しているのだと感じています。

また、岐阜や福井での各先生方との対話は、50年間の私自身の教師としての省察の場であり、教育観を磨き直す貴重な機会でもありました。学校改革は制度や仕組みの変更だけではなく、そこに関わる人々の思いと関係性の変容によって初めて動き出すことを、改めて深く理解することができました。先生方の抱える葛藤や迷いに触れるたび、教育の営みがいかに人間的で、同時に複雑であるかを痛感し、その歩みに寄り添うファシリテーターとしての責任の重さを感じてきました。

この十年間、私自身が多くの学びと励ましをいただきました。ともに考え、悩み、笑い合いながら積み重ねた時間は、これからの人生においても大切な財産となります。学校をよりよい場にしようと尽力される先生方の姿勢は、これからも私の心の支えであり続けることと思います。

最後になりましたが、これまで関わってくださったすべての先生方に心より感謝申し上げます。皆さまの探究の歩みが、これからの学校と子どもたちの未来を力強く支えていくことを願っております。本当にありがとうございました。

「学ぶ」ということ

元連合教職開発研究科 准教授 山浦 光雄

長野県より交流人事で福井大学教職大学院へ来させていただきます、3年間、大変お世話になりました。

3年前の2月、初めて福井大学教職大学院のラウンドテーブルに参加しました。私の話をじっくりとグループの方に聞いていただき、また他の方のお話をじっくりお聞きし、語り合うことで、今まで感じたことのないような充実感と、元気が湧いてくる感覚を覚えました。そして、「ああ、自分はこれからここで仕事をさせていただくんだな」と期待に胸を膨らませて大学をあとにしたことを覚えています。一方で、わからないこともありました。ラウンドテーブルのチラシには、大きく「実践し、省察するコミュニティ」と書かれていました。「実践するとは?」「省察するとは?」「コミュニティとは?」ラウンドテーブルでの時間を体験した後でも、その意味はわかりませんでした。

福井大学教職大学院でのスタッフとしての3年間を振り返ると、まさに「実践し、省察するコミュニティ」とは何なのかを、自分自身の心と体を使ってたっぷり考えさせていただいた3年間だったのだと振り返っています。

金曜カンファレンスの授業は衝撃でした。大学院の授業ということで、誰か大学の先生が前に立ち、パワーポイント等を使いながら講義をされるのだと思っていました。でも、前に立ったのは若い院生さんでした。授業の内容は、グループでの語り合いによる「インターンシップの振り返り」でした。「誰かが『教える』ことはしないの?」「『振り返る』こと自体が授業なの?」「今日の授業の『まとめ』はないの?」ハテナが自分の中にたくさん浮かんできました。

水曜5限の「探求」の授業、木曜1限の「生涯学習とアクティブラーニング」、県の中堅教諭等研修、社会教育主事講習、学部集中講座、NITSの研修、エジプト研修等、多くの授業や研修に関わらせていただきましたが、どれも同じような仕立て、構造となっていました。誰かが「教える」のではなく、学び手本人が選んだり、読んだり、書いたり、語り合っ

たり、振り返ったりしながら、グループのメンバーと共に、自分と向き合っていく、自分を更新していく、そうした学びとなっていると自分には感じられました。

授業や研修に関わらせていただいたり、ウエンガーの「状況に埋め込まれた学習」「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読んだり、ショーンの「省察的実践者の教育」などを読んだり、大学の先生方と語り合ったりする中で、ハテナがだんだんと解けてきました。「やってみて、振り返って、またさらによくしようとやってみる。仲間と共に」。そのプロセス自体をとっても大切にする。そして、そのプロセス自体が「学び」なのだという思想なのだ。そして、その「学び」観のもとに、この教職大学院のカリキュラムや組織や仕事が網の目のように精緻に創られているのだということにも気づいていきました。

NITSの研修や、エジプト研修にも関わらせていただく中で、この福井大学教職大学院の考え方や教育は、日本や世界をも変える本当のものだとさらに感じました。NITSに集まってくる全国の先生方も、1ヶ月福井で過ごしたエジプトの先生方も、研修の終わりには別れがたいほど仲良くなり、とても充実した表情で会場をあとにされていました。まさに、実践を持ち寄り、互いに深く省察し合った時間、仲間であったからこそその充実した表情なのだ、3年前に初めてラウンドテーブルに参加した時の自分の感覚と重ねながらいつも感じていました。そしてこの充実の感覚は、世界共通のものであるのだと感激していました。

こうした授業や研修でも、教務部会の仕事でも、教職大学院のスタッフの皆様、事務の皆様にたくさん教えていただき、支えていただきながら3年間やり遂げることができました。本当にありがとうございました。

福井大学教職大学院で経験させていただいたこの得がたい経験を大切にしながら、長野に戻ってまたがんばりたいと思います。大変お世話になりました。今後とも、よろしくお願いいたします。

出会い、語り合いに感謝

元連合教職開発研究科 非常勤講師 嶋田 直美

私の福井大学連合教職大学院での日々は、「皆さんの学び合いは楽しい!」「私も現職時代に、ここで学びたかったな・・・」などと考えつつ、大学の先生方、院生の皆様との出会いに感謝することばかりでした。日々、実践に取り組む院生の皆さまの仲間に入れていただき、カンファレンスで互いをリスペクトしながら話を聞き語り合う中で、私もたくさん気づきを得ました。充実し、かつ心地よく、学ぶ楽しさと意義を再認識させていただいた時間でもありました。(もっと学びたい、好奇心、わくわくする気持ちも。) 皆さまのおかげです。

子どもの学びと教師の学びは相似形といいます。教職大学院での学びが、子どもたちの「もっと共に考えたい、調べたい、知識を得たい、そのために頑張りたい。」につながり、「一人で学ぶのもいいけど、仲間(先生、先輩、後輩も含む)と学ぶのはもっと素晴らしい。」と子どもたちが感じていくことを期待している今です。

先日、ある小学校で授業を見せていただく機会に出会いました。低学年の子が4人グループで考えて

一つのものを作り上げていく授業です。一人の子が「できないから〇〇はやりたくない。」と言ったのですが、他の子が「〇〇ができないなら、△△ならできる?〇〇は私たちがするから、できることしようよ。」と話す会話が聞こえてきました。小さい子たちが、互いの思いを伝え合い、理解し合おうとしながら活動している姿でした。そこには日ごろの先生の関りがあるのですが、教職大学院でのカンファレンスのようでした。これって「人」が集まる「学校」だから成り立つ学びでは・・・。タブレットやAIの活用などで社会の関りや学校教育も変化しつつありますが、子どもたちが安心して学び合い認め合える場をつくることの重要性を改めて感じた時でした。また、教師には、教え方の他に子どもたちの考えを真摯に聴きくことや子どもの思いを認め、学びの様子や状況をしっかり見取り、主体性を尊重し支えていくことは教師の大きなやりがいの1つだと、ここで皆様に出会ったことから改めて感じてさせていただきました。本当にありがとうございました。



令和8年度年間計画



2026年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画			2026. 3. 17 現在					
4	1 水		5	1 金		6	1 月	
	2 木			2 土			2 火	
	3 金	週間カンファレンス 12:50- (授業研究・教職専門性開発コース)		3 日	憲法記念日		3 水	
	4 土	開講式 13:00-15:30 オンサイト会場:福井の東京 オンライン:Zoom 福井の岐阜 特別支援教育ゼミ ガイダンス		4 月	みどりの日		4 木	
	5 日			5 火	こどもの日		5 金	
	6 月	入学式(参加は任意)		6 水	振替休日		6 土	特支ゼミ 9:00-16:00
	7 火			7 木			7 日	
	8 水			8 金			8 月	
	9 木			9 土			9 火	
	10 金	週間カンファレンス(前期7月17日まで)		10 日			10 水	
	11 土			11 月			11 木	
	12 日			12 火	運営協議会(オンライン)		12 金	
	13 月			13 水			13 土	
	14 火	4系 カリキュラム開発基礎・実践研究 (4系免P1年次除く) 18:00-18:45		14 木			14 日	
	15 水			15 金			15 月	
	16 木			16 土	月間合同カンファレンスA 9:30-15:20 オンサイト会場:福井 オンライン: Zoom 特支ゼミ 15:30-17:00		16 火	
	17 金			17 日			17 水	
	18 土	月間合同カンファレンスA 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		18 月			18 木	
	19 日			19 火			19 金	
	20 月			20 水			20 土	
	21 火			21 木			21 日	
	22 水			22 金			22 月	
	23 木			23 土	月間カンファレンスA 9:30-15:20 オンサイト会場:東京		23 火	大学祭
	24 金			24 日			24 水	大学祭
	25 土	月間合同カンファレンスB 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom		25 月			25 木	
	26 日			26 火			26 金	
	27 月			27 水			27 土	
	28 火			28 木			28 日	
	29 水	昭和の日		29 金			29 月	
	30 木			30 土	月間合同カンファレンスB 9:30-15:20 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		30 火	
		31 日						
7	1 水		8	1 土	※それぞれが必ずいずれか一方に 出席 夏期集中講座Cycle2a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・岐阜・東京 オンライン:Zoom	9	1 火	
	2 木			2 日			2 水	
	3 金			3 月			3 木	推薦入試第1回出願受付開始
	4 土	シンポジウム 8:40-17:40		4 火	夏期集中講座Cycle2b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		4 金	
	5 日	ラウンドテーブル 8:20-14:00		5 水			5 土	
	6 月			6 木			6 日	
	7 火			7 金	オープンキャンパス(学部)		7 月	
	8 水			8 土	夏期集中講座Cycle3a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		8 火	
	9 木			9 日			9 水	
	10 金			10 月			10 木	
	11 土	月間合同カンファレンスA 9:30-15:20 オンサイト会場:福井・小浜 オンライン:Zoom 特支ゼミ 15:30-17:00		11 火	山の日		11 金	
	12 日			12 水			12 土	
	13 月			13 木			13 日	
	14 火			14 金			14 月	
	15 水			15 土			15 火	
	16 木			16 日			16 水	
	17 金	事前履修オンライン説明会		17 月	夏期集中講座Cycle3b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・岐阜 オンライン:Zoom		17 木	
	18 土	月間合同カンファレンスB 9:30-15:20 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		18 火			18 金	第1回推薦入試
	19 日			19 水			19 土	夏期集中講座Cycle3C* (予備日) 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom
	20 月	海の日		20 木			20 日	
	21 火			21 金			21 月	敬老の日
	22 水			22 土			22 火	国民の休日
	23 木			23 日			23 水	秋分の日
	24 金			24 月			24 木	
	25 土	※それぞれが必ずいずれか一方に出席 夏期集中講座Cycle1a* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 東京 岐阜 オンライン:Zoom		25 火			25 金	
	26 日			26 水			26 土	特支ゼミ 9:30-16:00
	27 月			27 木			27 日	
	28 火			28 金			28 月	
	29 水	夏期集中講座Cycle1b* 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		29 土			29 火	推薦入試第1回合格発表
	30 木			30 日			30 水	
	31 金			31 月				

10	1 木	後期授業開始		11	1 日			12	1 火		
	2 金	週間カンファレンス(後期1月29日まで)			2 月				2 水		
	3 土				3 火	文化の日			3 木		
	4 日				4 水				4 金		
	5 月				5 木				5 土	特支ゼミ 9:30-16:00	
	6 火	4系 カリキュラム開発基礎・実践研究 (4系免P1年次除く) 13:00-16:45			6 金				6 日		
	7 水				7 土	第2回推薦入試			7 月		
	8 木				8 日				8 火		
	9 金	ストレート対象事前説明会(対面)			9 月				9 水		
	10 土				10 火				10 木		
	11 日				11 水				11 金		
	12 月	スポーツの日			12 木				12 土		
	13 火				13 金				13 日		
	14 水				14 土				14 月		
	15 木				15 日				15 火		
	16 金				16 月				16 水		
	17 土				17 火				17 木		
	18 日				18 水				18 金		
	19 月				19 木				19 土		
	20 火				20 金	推薦入試第2回合格発表			20 日		
21 水	第2回推薦入試出願受付開始		21 土	月間合同カンファレンスA 9:30-15:20 長期実践研究報告の構成 15:30- オンサイト会場:福井 小浜 オンライン:Zoom 東京 サテライトRT		21 月					
22 木			22 日			22 火					
23 金			23 月	勤労感謝の日		23 水					
24 土	月間合同カンファレンスA 9:30-15:20 長期実践研究報告のガイダンス 15:30- オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom 特支ゼミ 15:30-17:00		24 火			24 木		中堅研修 第三期			
25 日			25 水			25 金		中堅研修 第三期			
26 月			26 木			26 土					
27 火			27 金		附属特支公 開研究会	27 日					
28 水			28 土	月間合同カンファレンスB 9:30-15:20 長期実践報告の構成 15:30- オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom		28 月	冬期集中講座a 9:30-17:00 オンサイト会場:福井・岐阜・東京 オンライン:Zoom				
29 木			29 日	入試説明会		29 火					
30 金			30 月			30 水					
31 土	月間合同カンファレンスB 9:30-15:20 長期実践研究報告のガイダンス 15:30- オンサイト会場:福井・東京 オンライン:Zoom	附属幼稚園 公開研究会				31 木					
1	1 金	元旦		2	1 月			3	1 月		
	2 土				2 火				2 火		
	3 日				3 水				3 水		
	4 月	冬期集中講座b 9:30-17:00 オンサイト会場:福井 オンライン:Zoom	4系授業		4 木				4 木		
	5 火				5 金				5 金		
	6 水				6 土	第1回入試			6 土		
	7 木				7 日	長期実践研究報告会 9:30-12:30			7 日	特支ゼミ 9:00-16:00	
	8 金				8 月	第2回入試出願受付開始			8 月		
	9 土	冬期集中講座予備日 9:30-17:00			9 火				9 火	運営協議会(オンライン)	
	10 日				10 水				10 水	第2回一般入試合格発表	
	11 月	成人の日			11 木	建国記念の日			11 木		
	12 火				12 金				12 金		
	13 水				13 土				13 土		
	14 木				14 日				14 日		
	15 金				15 月				15 月		
	16 土	大学入学共通テスト			16 火				16 火		
	17 日	大学入学共通テスト			17 水	第1回一般入試合格発表			17 水		
18 月	第1回入試出願受付開始		18 木			18 木					
19 火			19 金			19 金					
20 水			20 土	シンポジウム 8:40-17:40		20 土					
21 木			21 日	ラウンドテーブル 8:20-14:00		21 日	春分の日				
22 金			22 月			22 月	振り替え休日				
23 土			23 火	天皇誕生日		23 火	学位記授与式10:00~12:00 (参加は任意) 学位記伝達式・再出発カンファレンス 18:00-20:00				
24 日			24 水			24 水	インターンシップ説明会				
25 月			25 木			25 木					
26 火			26 金			26 金					
27 水			27 土	第2回入試		27 土					
28 木			28 日			28 日					
29 金						29 月					
30 土						30 火					
31 日	長期実践研究報告締め切り					31 水					

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】

春のやわらかな日差しとともに、新年度が始まりました。新たな院生を迎え、また一つ新しい学びの歩みが始まります。学校現場等からの多様な実践や経験が持ち寄られ、対話や省察を通して互いに学び合う姿は、本教職大学院の大きな魅力の一つです。本ニュースレターでは、そうした日々の学びや実践の様子をお伝えしていきます。読者の皆さまとともに、教育やコミュニティの在り方について考え、つながりを深める機会となれば幸いです。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

(2026 年度 Newsletter 担当一同)

教職大学院 Newsletter
No.205

2026.4.17 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

岐阜聖徳学園大学・富山国際大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp